

回覧新聞『大日本』の「近世名士傳 其一 麻布大盡傳」:

南方熊楠の下書きと完成版の比較¹

吉 川 史 子

(受付 2014 年 10 月 31 日)

‘Azabu-daijin-den’ in the Circular Newspaper *Dainippon*: A Comparison of Two Versions of a Biographical Article Written by Kumagusu Minakata

Fumiko Yoshikawa

This paper examines how Kumagusu Minakata developed a biographical article entitled ‘*Azabu-daijin-den*’ [‘A Biography of *Azabu-daijin*’] in the Circular Newspaper *Dainippon* published in Ann Arbor, Michigan in 1889. The article was written as the first one in a biographical series named ‘*Kinsei Meishi-den*’ [‘A Biographical Series of Modern Celebrities’]. *Azabu-daijin* is a nickname of Taijiro Nakagawa, who was a close friend of Kumagusu when they were both in Ann Arbor from 1888 to 1889. The article introduces Taijiro’s family background and life including a lighthearted account of his romantic episodes. There is a draft of this article in one of Kumagusu’s notebooks used while he was in America. The draft is much shorter and different in some respects from the final version of the article.

First, the draft of Kumagusu’s article is transcribed here because it has not been put in type though the final version has been in print included in the first volume of *Minakata Kumagusu Nikki* [*The Diaries of Kumagusu Minakata*] published in 1987. Next, records related to Taijiro Nakagawa are brought together. Finally, a comparison between the draft and final version of the article is carried out and the differences between the two versions are closely examined. These are analyzed by taking into account two other writings by Kumagusu which also describe the life and character of Taijiro Nakagawa, one in another circular newspaper *Chinji-hyōron* and the other Kumagusu’s letter written in 1892 addressed to his childhood friend, Takesaburo Kitahaba.

By identifying the differences between the two versions, that is, what is omitted and what content is developed in the final version, this paper helps shed light on Kumagusu’s everyday interests and on the development of his writing style in his early days.

1 ©Fumiko Yoshikawa

1. は じ め に

南方熊楠が在米時代に民権家の友人達と一緒に1889年2月²に発行した回覧新聞『大日本』（入間市立博物館所蔵）の二面には「近世名士傳 其一 麻布大盡傳」という人物伝が掲載されている。この回覧新聞に熊楠が書いたと見られる記事は他にもいくつかあるが、アメリカ時代のノート³に下書きが見つかるのは、熊楠が当時親しくしていた友人中川泰次郎（なかがわたいじろう）をユーモアたっぷりに紹介したこの人物伝のみである。当人物伝は熊楠が書いたことが間違いない記事なのであるが、彼の思想を表したものではないからか、1987年に『南方熊楠日記1』（以後『日記1』）にその翻刻文が収められて以来さほど注目されていない。しかし、若き日の熊楠が文章を完成させる過程を観察することは、後の熊楠の執筆方法を考察する上で必要な作業であると思われる。本稿は、次節でまず、このアメリカ時代のノートに残された「麻布大盡傳」の下書きをできる限り解読し、翻刻する。第3節では、この人物伝で紹介された中川泰次郎という人物について明らかになっていることをまとめ、第4節でこの記事の下書きと完成版とを比較考察する。

2. 「麻布大盡傳」の下書き

以下は、南方熊楠顕彰館所蔵「アメリカ時代ノート（4）」に書かれた「麻布大盡傳」の下書きの翻刻である。取り消し線を引いて消されている部分も解読可能であれば、大括弧に入れて示す：

麻布大尽[卓絶]空吾ノ士ト謂つべし、^{ママ} 矣、昔しピサゴラス道ヲ希臘ニ傳フ、其身常ニ分レテ
東西南北ス 是ヲ以テ同時一方ノ[宴會]遊筵ニ[臨ミ]他方ノ庠序ニ講談ス仲尼[會計]胥吏ト
ナリテ會計□[宴會し]当し、牧[官]司トナリテ畜繁殖ス、是レ皆ナ遠古ノ人史傳或ハホラヲ
傳ル所有シ未ダ猥ニ信スヘカラサルナリ、下テフランクリン出[ルニ及ヒ]デ既ニ一身能ク理
学者、政治家道德家雄弁者ヲ兼ネ[サー]SIR サージョンラツボック、本職銀行頭取ノ外ニ古
生物学、社會学、動物学植物学ニ功名アルノ如キ惟勤勉千万纔ニ事ニ堪ルニ在ルノミ、是レ言
フニ足ラサル也、若シ夫レ[迫]現時、遊惰ニシテ万事ニ堪ヘ[無[不]男]醜男ニシテ女ニホレ
ラレ、頑鈍ラシク見ヘテ[才]多藝ニ敏ニツノ時日ニ億[万]兆ノ事件ニ遭遇セル者我レ麻布

2 『大日本』紙面に記載された発行日は明治22年2月1日であるが、熊楠の『日記』では2月4日発行となっている。

3 南方熊楠顕彰館（田辺市）所蔵「アメリカ時代ノート（4）」[自筆 074]。

大尽ニ於テ是ヲ見ル、大尽[氏]姓源、慶応元年ヲ以テ大尽ヲ京師ニ生[ル]ム其母弥次郎兵エ喜多ハニ赤坂テ遇フト見て[夢]サム孕ムコトアリ 大尽人ト為テ体軀四角、顔面並行舩四辺形ヲ成[ス]シ、顔骨突起、眞ニ異常ニ頭髮熊ノ如ク頂点ニ丸禿アリ、大尽ノ父[元碩ト称ス]山師ヲ以テ名有り、又兵畧ニ富リ、[安政]元治故孝明天皇勅シテ上野寛永寺ヲ攻メシム、[此時]西郷隆盛是部下ニ在リ、隆盛ト共ニ写ス所ノ写真画現ニ麻布氏ノ所蔵ニ在リ[世ニ]トイフ、世ニ傳フ隆盛生涯[写真]写影セズト 今麻布氏ノ説ニ拠テ其眞ナラサルヲ知ル [麻布氏]大尽□□二歳父ノ為ニ携ラレテ京都ニ移ル、八歳画ヲ善シ九歳碁ヲ善シ、十三能ク詩ヲ誦シテ戯ル、人皆ナ称ス、ヨク中川氏ヲ興ス者ハ必ス此兒ナラント 後大学文学部ニ入り肺[病]を病む[□□]退テ同人社ニ在リ（此時代ノ事史其傳ヲ失フ、文学部ガサキヤラ同人社ガ先ヤラ判然セズ）幼年生ヲ督ス、幼年生ノ艶ナル者悉ク大尽ノ網中ニ在リ、南部候ノ令息亦免レズ[ト云フ]、此時大尽飯島某ト尤も[親]暱善、一日[松葉]針ニ墨シ各互名ヲ其指ニ[名ヲ]鐫ル。後大尽女道ニ凝ルニ及ビ驟然[男色]其事ノ野ナルヲ悟リ、硝酸ヲ以テ其字ヲ焼キ抜クトイフ、既ニシテ大尽以為ク、北閭洞房三千人[ノ娼妓]美人[山]花ノ如ク酒河ノ如シ、豈ニ一遊無奮起袂ヲ投シテ遠征ヲ試ル 是レ^{ママ}日夜^{ママ}憂ナク



図1 南方熊楠頭影館所蔵「アメリカ時代ノート(4)」の「麻布大盡傳」の下書き

3. 在米時代の友人、中川泰次郎

先に述べたように、熊楠がこの人物伝で紹介した「麻布大盡」とは、友人中川泰次郎のことである。熊楠の『日記』を調べてみると、中川は、1887年11月25日の当時アナーバーにいた日本人のリストにおいて初めて名前が挙がり、京都出身であることが付記されている。熊楠はアナーバーに滞在している間、彼と頻繁に食事をともにしたり、酒を飲んだりしており、非常に親しくしていることがわかる。『大日本』だけでなく、この後1889年8月17日（『日記』では19日）に発行される『珍事評論』第一号においても、熊楠は、「アナバ府人傑銘々伝画抄 其一麻布泰次郎君」⁴という『大日本』の「近世名士傳 其一 麻布大盡傳」の後半と内容が重なるような記事を執筆、掲載している。『珍事評論』第一号のこの「アナバ府人傑銘々伝画抄」の最初に付いている「目録」には、「麻布泰^{ママ}二郎氏」の前に「法螺列伝」と添えられている。また、同じ『珍事評論』中の「初春三番叟の評論」において、フランス革命に関わった人物に仲間を例えている部分で、中川はジャン＝ポール・マラー（Jean-Paul Marat）に擬えられ、「会議の場でなんにも云はず、かげにて珍説をふれまはすこと第一等なり。」（『日記1』p. 398）と評されている。きっと大げさに面白おかしく話をして周りの友人を楽しませるような人物だったのであろう。

この中川泰次郎については、当時の熊楠の『日記』に頻繁に登場するにも関わらず、先行研究にはその経歴についての情報がほとんどない⁵。若くして亡くなったので、あまり注目されなかったのだと思われる。彼を一番詳しく紹介したのはおそらく熊楠であろうから、熊楠が書いた『大日本』の「麻布大盡傳」などを見るのが一番だが、それにしても、半分嘘なのか本当なのかかわからないことが面白おかしく書かれており、どこまで信じてよいのかははっきりしない。拙論（2011）のために、ミシガン大学のベントレー歴史図書館（Bentley Historical Library）で卒業生の死亡記事ファイル（necrology files）を調査した時に見出した中川のファイルには“Died in Tokyo, 1893/age 33”と書き込まれた書類が入っていたので、1859年か60年生まれで、1893年に東京で亡くなったようだ。熊楠は1867年生まれだから、中川のほうが七歳ほど年上だったことになる。熊楠がアナーバーに長く滞在するようになった1888年から中川が帰国する1889年末までしょっちゅう一緒に飲み歩いていて、気の置けない友人としてつきあっていたようだが、『日記』を見ると、1889年3月22日に、前日ビリヤード場でビリヤードテーブルのラシャを破ってしまった熊楠のためにその損料交渉に行ってくれ

4 『日記1』 pp. 418-419 参照。

5 『南方熊楠を知る事典』（1993）の「南方熊楠をめぐる人名目録」にも『南方熊楠大事典』（2012）の「人名録」にも取り上げられていない。

た⁶ということが書いてあるので、ひょうきんで面白いだけでなく、良い先輩でもあったのだと思われる。

長谷川・武内（1995, p. 224）の人物注には、「渾名が麻布大人⁷。学者中川立碩の子。ミシガン大学で法律を学び、一八八九年帰国し、山梨県で中学教師。」⁸とあるが、中川泰次郎が明治15年（1882）年9月7日と9日⁹に『読売新聞』の朝刊に出した死亡通知によると、父親の名前は「元績」である。『大日本』の「麻布大盡傳」においては、父親の名は「元碩」と紹介されている。一体どの名前が正しいのだろうかと思うが、おそらく「元績」が正しいと思われる。『大日本』の「麻布大盡傳」には、「安政の末外夷屢々我邦に不敬なり。孝明天皇朝臣を集め奇士を尋ぬ。松苗先生乃ち元碩を以て進む。元碩感銘自奮て功を倣さんと欲す。」（『日記1』p. 436）とあり、中川泰二郎の父が尊王攘夷運動に関わったことを紹介している。尊王攘夷運動に関わった人物名を調べてみると、王政復古（慶応3年12月9日；西暦では1868年1月3日）の前日に岩倉具視の屋敷で政変の準備をした五名の非蔵人の中に、「中川元績」の名が挙がっている。井上（1991, p. 320）によると、その日、中川ら五名の非蔵人は「王政復古の宣言文をはじめ、出動する諸藩への軍令状、その他さまざまな布達文など」の作成をはじめていたという。また、『明治史料顯要職務補任録』（1902, pp. 19, 87）¹⁰には、内閣の參與として中川元績が「（明治）元年二月廿日任」「元年閏四月廿一日罷」とあり、内務省の内務事務局判事としても「元年二月廿日參與ヲ以て兼任」「元年閏四月廿一日廢官」とある。また、小林（1998, p. 121）にも、「中川元績は、内国事務局判事となり、その後諸官を歴任するが七三年（明治六）五月に免官」と、元績の経歴に関する記載がある。元績はまた「對馬」とも呼ばれたようで、徳富猪一郎（1943）の「人物概覽」に「中川對馬 名は元績、非蔵人。明治元年二月參與兼内國事務局判事に任ぜらる。」とある。元績の名よりも「中川對馬」という表記のほうが、明治維新に関係する文書に多く見られる¹¹。宮廷ではむしろ「中川對馬」で通っていたようである。

6 「此夜中川氏予の為にブリッスに対し昨夜の損料を談ぜらるゝに、初には十弗といひしが遂に三弗ときまる。」（『日記1』p. 198）

7 『大日本』等では「麻布大盡」となっている。

8 この人物注における中川の情報は主に長谷川（1987）「喜多幅武三郎宛書簡について—在米時代の一未公開史料—」において紹介された1892年にジャクソンヴィルから送ったと見られる書簡に基づいていると思われる。原書簡は見つかっておらず、その筆写原稿（南方熊楠顕彰館蔵[書簡 0597]）だけが残されているもので、この資料においては、泰次郎の父の名は「立碩」となっている。当時泰次郎が山梨県で中学教師をしていたことも、この書簡の飯島善太郎を紹介した部分に「飯島善太郎（武州人）右中川と今の同人社に学べり（中川現在山梨県中学校教師）。」（長谷川 1987, p. 4）とあるので、この書簡から得た情報であると思われる。

9 どちらの死亡通知も全く同じ文面である。

10 金井之恭ほか著（1902）『明治史料顯要職務補任録』上巻。東京：成章堂。

11 修史館編（1885）『補正明治史要』、多田好問編（1927）『岩倉公實記』中巻にも「中川對馬」の名が挙げられている。

『読売新聞』の死亡通知によると、泰次郎の父元績は1882年（明治15年）8月13日に、母（名は信）もその直前の11日に病死している。二人の葬儀は9月10日に谷中天王寺墓所（現在の谷中霊園）で行われるとある。この時の泰次郎は二十二歳か二十三歳であったはずで、住所は「麹町區下六番町十番地」となっている。拙論（2011）を書いた時点では、調査不足で長谷川（1987）に翻刻されたジャクソンヴィル滞在中の1892年に喜多幅武三郎に宛てた書翰に在米中に知り合った友人のことが書いてあることに気がついていなかったのだが、この書翰に泰次郎の父親がコレラで亡くなったことが記されている¹²。また、同じ書簡には泰次郎が「神奈川県令浅田〔徳則〕の妻の弟」であるということも紹介されている¹³。浅田徳則（1848-1933）は京都出身の政治家で貴族院議員も務めた人物として知られている。

「麻布大盡傳」では、明治15年に父親が他界した時、泰次郎が東京大学文学部に在籍していたと述べられているが、*The Calendar of the Departments of Law, Science and Literature 2540-41 (1880-81)* には、文学部の一年生として、中川泰次郎の名前があり、次の年のものには名前がないので、実際には1880年（明治13年）に文学部に入学し、翌年には退学していたものと思われる。また、『東京大学予備門一覧：本覺』の明治12年から13年のものには「第一級二ノ組」のところに彼の名が挙がっている¹⁴。予備門は明治10年（1877年）に東京英語学校と東京開成学校普通科が合併してできたので、予備門設立の前にはこのどちらかの学校に通っていたのかもしれないが、詳細は不明である。「麻布大盡傳」によると、父親が亡くなった頃同人社にも通っていたとのことだが、いつからいつまでのことなのかははっきりしない¹⁵。

ベントレー歴史図書館の資料で死亡記事ファイルの他に中川泰次郎の名前が見つかるのは *University Register. -Law Department.* という法学部への登録記録で、1880年から1891年の登録が記載してあるものだが、1888年9月12日に4年生として登録されており、東京の出身、28歳であると記載されている¹⁶。熊楠の『日記』によれば、翌年6月27日に法学士（LLB）の学位を取得し、12月22日に熊楠の部屋で送別会を開いてもらって、翌日帰国の途についている。

- 12 長谷川（1987）p. 3 参照。『大日本』の「麻布大盡傳」では、西瓜を食べ過ぎて病気になって亡くなったと書かれている。
- 13 熊楠は、昭和8年3月31日の『日記』の「豫記」欄で、『大阪毎日新聞』の浅田徳則の死亡記事に言及しており、「亡友中川泰次郎ノ姉夫也中川氏ノ父ハ巖垣松苗門人非蔵人〇〇トイヒシ勤王家ノ由泰次郎氏ヲ聞及ベリ」と書いて、「〇〇」の左側に「元績」と正しく泰次郎の父の名を補入している。
- 14 その英語版 *The Calendar of Tokyo Daigaku Yobimon or Preparatory School of the University of Tokyo 2539-40 (1879-80)* においては、“FIRST GRADE. Division B.”の学生名簿に彼の氏名が挙がっている。
- 15 『同人社文學雑誌』の第七十九號（明治十五年六月二十日發兌）、第八十一號（明治十五年八月十日發兌）、第八十八號（明治十六年一月二十日發兌）の「紀事」欄の進級者の名簿に中川の名が挙がっているため、父親が亡くなった頃同人社に通っていたことは間違いない。
- 16 “1888 Sept. 12; Taijiro Nakagawa; 28; Tokio, Japan; Senior; 51 Orleans.”と記載されている。最後に書かれてあるのはアナーバーでの住所である。

1890年4月14日の熊楠の『日記』に「中川氏状に、先日新橋停車場にて不図右末有寿氏にあへり云々とあり。神田区に居たる由。」とあるので、帰国直後は東京に住んでいた可能性が高い。先に言及した1892年に書かれたと見られる喜多幅武三郎宛書簡に「現在山梨県中学教師」とあるので、山梨県立甲府第一高等学校の「沿革」をまとめたホームページに、明治26年2月8日から3月29日まで校長事務代行を務めたと記録されている中川泰次郎は、この熊楠の友人の麻布大盡と同一人物だと思われる¹⁷。ベントレー歴史図書館の死亡記事ファイルの記録が正しければ、何らかの理由でこの年東京で亡くなったことになる。

中川泰次郎に関係することを以下に年表としてまとめる。

1859/1860年（安政6年か7年） 京都で誕生¹⁸

1868年1月3日 王政復古、この時は京都にいたと思われる
（1873年（明治6年） 同人社開設）

1879年（明治12年）9月より 東京大学予備門第一級に在籍

1880年（明治13年）9月 東京大学文学部入学

1882年（明治15年）8月 両親死去、9月 両親の葬儀

1888年（明治21年）9月 ミシガン大学法学部4年生に登録

1889年（明治22年）6月27日 ミシガン大学で法学士（LLB）の学位を取得、年末に帰国の途につく

1890年（明治23年）帰国して、おそらく東京に住む

1892年（明治25年）¹⁹ すでに山梨県尋常中学校教師として勤めている

1893年（明治26年）2月8日～3月29日 山梨県尋常中学校校長事務代行、この年死去

熊楠は、在米時代の1892年2月18日を境にして『日記』中で中川について触れることがなくなり、帰国し、田辺に落ち着いた後1910年11月30日、滞在した宿で彼にそっくりな人を見たことを記すまで中川の名前は出て来ない。この中川によく似た人は西面寛五郎という人だということが後でわかったようだ²⁰が、熊楠は羽山繁太郎のように、特に親しい友人に似た人を見かけると『日記』に書く傾向があるように思われるので、中川とは二年程度しか親し

17 http://www.first.kai.ed.jp/schools_ennkaku/m/（2014年10月31日検索）

18 『大日本』の「麻布大盡傳」に「その母（中略）元治元年某月某日を以て大尽を京都の邸に生む」とある。しかしながら、元治元年は1864年（もしくは1865年）なので、1888年にミシガン大学に28歳だと登録している記録と合わない。

19 喜多幅武三郎宛書簡（長谷川 1987, pp. 1-6）執筆の推定年による。

20 『日記』によると、1910年11月26日から熊楠は和歌山県日高郡龍神村（現田辺市龍神村）丹生川の「西面氏叔父方」に宿泊していたようである（『南方熊楠日記3』p. 403）。そこで中川泰次郎によく似た西面寛五郎を見たと思われる。

く付き合うことがなかったが、それでも大切に思う友人、先輩だったのではなからうか。

4. 「麻布大盡傳」の下書きと完成版の比較

本節では「麻布大盡傳」の下書きと完成版を比較考察し、気がついたことをまとめる。『大日本』に書かれた完成版については、『日記 1』（pp. 435-437）に収録された翻刻を参照されたい。「アメリカ時代ノート（4）」の下書きは、完成版と比べるとずっと短く、完成版の終わりのほうに書かれた内容は下書きには全く書かれていない。このノートに残された下書きと、『大日本』の完成版との間に、もう一つ下書きを作ったのでなければ、熊楠は途中まで下書きを作って、残りはなんとかかなりそうだと思って書くのを止めたのかもしれない。下書きの最後がいい加減な終わり方をしているのを見ると、そのように思える。武内（2001）が主張するように『大日本』の「麻布大盡傳」を含む二面のほとんどを筆記した人物が熊楠ではないとすると、下書きをそっくり最後まで清書しているわけではないので、下書きを見ながら熊楠がこの記事を読み上げて、友人に筆記させたのであろうか。そうだとすると、書き損じる可能性が高いと思われる²¹が、『大日本』にほとんど訂正がないところを見ると、我々の知らない下書きが、我々が手にしている下書きが作られた後に作成されて、それを筆記者が回覧新聞に清書したのであろうか。誰がどのように記事を清書したのかは、現在見つかっている資料からだけでは知る由もない。下書きの送り仮名がカタカナであるのに対して、完成版の仮名はひらがなであることも、下書きと完成版の大きな違いである。他の記事の送り仮名に合わせて完成版ではひらがなにしたのかもしれないと思ったが、カタカナの送り仮名で書かれている記事もあるので、『大日本』の二面のほとんどを筆写した人物の好みによるものと思われる。

「麻布大盡傳」の最初の部分は下書きと大きくは変わらない。いわゆる「てにをは」などが少し違っているところ以外では、下書きで「ピサゴラス道」となっているところが清書では「ピサゴラス教」²²に、「其身常二分レテ」が「其兒毎に別れて」に、「史傳或ハホラヲ傳ル所有シ」が「史伝或は多少のほら有らん」に、「未ダ猥ニ信スヘカラサルナリ」が「未だ遽に信ずべからざるなり」に、「功名アルノ如キ」が「高名有る如き」に、「惟勤勉千万纔ニ事ニ堪ルニ在ルノミ」が「惟勤勉の勞纔に其斯の如きを致すのみ」に、「若シ夫レ現時、遊惰ニシテ万事ニ堪ヘ」が「若し夫れ今の時に於て、性惰にして能く事に堪へ」に、「醜男ニシテ」が「顔醜にして」に、「頑鈍ラシク」が「鈍らしく」というように、『大日本』に掲載するにあたって

21 事実、下書きにはたくさんの書き直し（一度書いたことばを取り消し線で消して書き直したもの）が見られる。

22 『大日本』の「麻布大盡傳」からの引用は全て『日記 1』 pp. 435-437 に基づく。

より良い表現に推敲されているようだが、その内容の意味するところはほとんど変わらない。下書きで「一ツノ時日ニ億兆ノ事件ニ遭遇セル者」と書いているところは、完成版で「一時一日の間善く億兆の事件を処して敢て間違ひを惹起さる者」になっており、超人ぶりを誇張した表現に変えられている。この部分は、中川が一度にいくつものことができるというのを、ピタゴラス、孔子、ベンジャミン・フランクリン、サー・ジョン・ラボック（Sir John Lubbock; 1834–1913）らのようだと誉め称える内容である。熊楠は多才な人物が好きだったようで、例えば、この記事と同じ二面に書かれた「雑報」中のおそらく熊楠が書いたとみて間違いのない「解散の二理由」と題された記事の次の記事²³においても、政治、軍事、学問に優れたシーザーやアルフレッド大王に言及している。中川が本当に多才であったかのかどうかは、『珍事評論』の「アナバ府人傑銘々伝画抄」の目録で「法螺列伝」と評されたくらいだからわからないが、中川が語った武勇伝のほとんどが話を大げさにして面白おかしくした冗談だったとしても、熊楠にはその冗談が楽しいものであったのだろう。

その次の話題は中川泰次郎の経歴を紹介するものである。先に述べた母親信については、『東海道中膝栗毛』の弥次喜多に赤坂で会う夢を見て泰次郎を妊ったというおかしなエピソードが紹介されるだけで、詳しくは言及されないが、父親については下書き、完成版の両方で詳細に述べられている。さらに、完成版のほうには下書きになかったエピソードも書き加えられている。代わりに、下書きにはあるのに、完成版では削られているのが泰次郎の容貌の描写である。下書きは「大尽人ト為テ体軀四角、顔面並行鉢四辺形ヲ成シ、顔骨突起、眞ニ異常ニ頭髮熊ノ如ク頂点ニ丸禿アリ」と、その容貌が角張っている様子を描写し、頭頂の髪が薄かったことに言及しているが、完成版ではこの部分を割愛している²⁴。容姿をからかうことを躊躇したのかと思ったが、この頭頂の禿は、半年後に発行した『珍事評論』第一号の「アナバ府人傑銘々伝画抄 其一麻布泰次郎君」の冒頭で暴露されてしまう。この禿に熊楠はかなりこだわっていて、この記事に添えられた中川を描いたイラストに禿が描かれているだけでなく、『珍事評論』の「アナバ府飲中八仙之歌」では、中川は李白に喩えられているが、その挿絵の李白にもちゃんと禿が描かれている²⁵。

先に述べたように、父親元績については、完成版のほうのはるかに詳しく紹介している。元績が、貧しい家に生まれたにも関わらず、働きながら勉強して、儒学者巖垣松苗（巖垣東園; 1174–1849）の弟子となり、安政末の攘夷運動に参加したことについては、完成版にはあるが下書きでは言及されていない。逆に、下書きの「山師ヲ以テ名有り、又兵畧ニ富リ」と

23 熊楠がこの記事を書いたとする根拠については拙論（2014）を参照されたい。

24 下書きには、この文と前文の「大尽ヲ京師ニ生ム」の後とをつなぐような線が引かれているので、当初はこの文をその位置に挿入しようと考えていたのかもしれない。文のつながりが悪くなるので、完成版で割愛された可能性もある。

25 長谷川・武内（1995）p. 58 及び p. 55 参照。

いう内容は、『大日本』の完成版では削除されている。下書きにはこれに続けて「元治故孝明天皇勅シテ上野寛永寺ヲ攻メシム」とある。この文の「元治故」の部分は、あとで挿入されている。完成版のほうには、巖垣松苗が元績を孝明天皇に推薦したというエピソードがさらに加えられている：

孝明天皇朝臣を集め奇士を尋ぬ。松苗先生乃ち元^マ績^マを以て進む。元^マ績^マ感銘自奮て功を倣さんと欲す。西郷隆盛を部下に随へ東台を攻む。(『日記 1』p. 436；ルビは筆者)

下書きのままの文章だと、上野の寛永寺を攻めさせたのは孝明天皇のように思えるが、元績が戊辰戦争中の1868年に上野戦争に参加した時には孝明天皇はすでに亡くなっている。そのことに気がついて、下書きで「孝明天皇」のところに「故」を付けたりしたが、それでも十分であるとは思えず、完成版で巖垣松苗が孝明天皇に元績を推薦したエピソードが加えられたのかもしれない。

上野戦争の時西郷隆盛が部下だったということには、下書き、完成版ともに言及しており、元績と隆盛と一緒に写っている写真があるから隆盛が写真を生涯撮らなかったというのは嘘だろうという話も両方にあるが、完成版のほうは「世に伝ふ。西郷南洲生涯捉影せず、故に人、永山弥一郎の画を以て之に代ふと。」(『日記 1』p. 436)という永山弥一郎が描いた西郷の肖像画のエピソードを付け加えるなど、より凝った表現になっている。このあと、下書きでは泰次郎の神童ぶりを示す文が続き²⁶、父親の話から息子泰次郎の話に移行するが、完成版ではその神童の成長を表す文は省略され、下書きにはない父元績の話が加えられている。維新後、元績は、西郷は欲深くて一緒にやっていけないと感じて官職を辞し、麻布に豪邸を建て、日本橋の蛸殻町の米穀取引所で活躍して巨万の富を得たが、明治15年に西瓜の食べ過ぎで病気になるってなくなったというくだりである²⁷。父親が麻布に豪邸を建てたため、泰次郎のあだ名が「麻布」なのである²⁸。元績が辞職後米相場で儲けたというのが事実かどうかは確認できていないが、維新後早々と官職を辞したことは間違いない。3節で引用した小林(1998,

26 2節の下書きの翻刻中の「大尽□□二歳父ノ為ニ携ラレテ京都ニ移ル、八歳画ヲ善シ九歳碁ヲ善シ、十三能ク詩ヲ誦シテ戯ル、人皆ナ称ス、ヨク中川氏ヲ興ス者ハ必ス此兒ナラント」の部分である。

27 「維新功成るに及び、元^マ績^マ喟然として嘆じて曰く、西郷の人と為り烏喙鶏腿、苦勞を俱にすべきが、うまい夢を共に見るべからずと。即日印綬を解き、万金を投じて邸を麻布に構ふ。是より日に米相場を事とし、蛸殻街を震動せしめ、儲くる所ろ月に鉅万、明治拾五年(或云拾四年)西瓜を食ひ過し病て卒す。」(『日記 1』p. 436；ルビは筆者)の部分である。元績の没年がはっきりしないように書いてあるが、3節で紹介した死亡広告から、明治15年であることがわかる。

28 喜多幅武三郎宛書簡(長谷川 1987, pp. 3, 4)において、熊楠は「中川泰次郎(中略)法螺の大先生と称す。曾て曰く、吉原で四万円使へり、其邸麻布広尾町に在るを以て人称して麻布大尽といふと。」と、中川の話が嘘ばかりであることや、「中川泰次郎は金子常に空し。」という文で始まる金に困った中川が起こした珍事件に言及しているから、麻布に大豪邸が本当にあったかどうか定かではない。

p. 121) で明らかにされている通り、1873年（明治6年）5月に新政府官吏を辞職しているからだ。この「麻布大盡傳」の完成版に書かれているように、本当に西郷隆盛個人と気が合わなくて、職を辞したのかどうかは定かではない。だが、新政府を設立した薩摩、長州らの要人と廷臣出身の元續ら非蔵人達の反りが合わなかった可能性は十分に考えられる。王政復古に非常に貢献した非蔵人達が早々と辞めていることに言及している小林（1998）もそのように察している。

『大日本』中の完成版では、父親が亡くなって、泰次郎が葬儀を営み、跡を継いだところから、泰次郎の話になる。『読売新聞』に出した「死亡通知」によると、明治15年（1882年）9月10日のことで、その前の月（つまり8月）に父親だけでなく、両親とも相次いで失うという不幸に見舞われている²⁹。完成版によると、泰次郎は「海軍楽隊及び笙筆簞シヨウヒチリキ」を雇って盛大な葬儀を営み、東京中で評判になったという。「麻布大盡傳」完成版ではこの時東京大学文学部に在籍して、麻布から小石川水道端の同人社へも通っていたことになっているが、明治15年の前後の『法理文三学部一覽』に泰次郎の名はない。2節で述べたように、中川は1880年（明治13年）に文学部に入学し一年で退学したものと思われるので、この辺りは聞いた話を熊楠が随分いい加減に記事にまとめたのであろう。下書きは大学を中退したことにしか触れていないが、完成版ではその原因が肺疾（肺結核）だったことが述べられている。また、完成版には、「病治して同人社に入り塾長を勤む。」³⁰とあるが、下書きのほうには「幼年生ヲ督ス」としか書かれていないので、塾長を勤めたという情報も怪しいものである。この同人社の話に移行するのは、実は中川の恋愛遍歴を紹介するためである。下書きは「幼年生ヲ督ス」の後「幼年生ノ艶ナル者悉ク大尽ノ網中ニ在リ」と続くが、完成版のほうは、中川が意外性のある人物だとするこの伝記の趣旨により適合するように改変されている。「大尽顔貌蛙の如しといへども、自ら一種優美の徳有り」という文に始まり、中川がいかに女性に人気があったかを示す例が続いて、そのように人気があったのに、常に「蛾眉は性を伐るの斧なり、伉儷は事を蹶しむるの杭なり」と考えていたのでそれらの女性に簡単に応じなかったという話が差し挟まれてのち、同人社の子供で美しい子が悉く中川の手落到ちたという衆道武勇伝が紹介される。この同人社での話は下書きにも完成版にも見られる。また、飯島某という人との恋愛中にお互いの名前を指の裏に刻んだが、後に男性ではなく女性を好きになるようになって、硝酸でその字を焼き抜いたという恋愛に現を抜かしたがための失敗談のようなものも両版に見受けられる。女道に目覚めた中川の様子を「既ニシテ大尽以為ク、北閭洞房三千

29 3節で述べたように、父親の直接の死因はコレラである。母親も二日前に死去しているので、同じ病気で亡くなったのではないかと推測される。

30 喜多幅武三郎宛書簡（長谷川 1987, p. 4）においても、熊楠は中川が同人社の塾長を務めたと飯島善太郎から聞いたことに言及している。

人美人花ノ如ク酒河ノ如シ、豈ニ一遊無奮起袂ヲ投シテ遠征ヲ試ル 是レ^レ方^方日夜^夜更^更ナク」と書きかけたところで下書きは終わっている。同様の文は完成版にもあり、「大尽一日手を拍て曰く、北閨洞房三千室、美人花の如く酒河の如し、丈夫豈に一遊無くて可ならんやと。即夜袂を投じて塾門を出づ。」となっている。完成版のほうは、ここからさらに続く。その追加部分を簡単にまとめると、中川はその後遊里で毎晩のように遊んで金銭を無駄遣いし、その名前が芳原（吉原）に知れ渡るほどになったのだが、とうとう家の中に幽閉されてしまい、反省して本石町で石炭屋を始めたが、失敗して、芳原で使ったお金と合わせて四万四千両という莫大な金額になったという内容である。さらに、中川は文筆業に従事し、土佐の長宗我部盛親（1575-1615）の活躍など後世に伝わっていないことが多いことに憤慨して、『長曾^{マサモト}我部外伝』四十卷（或いは二十卷）を書き著して、黒川真頼³¹の校閲で毎月一号ずつ発行したと『大日本』の「麻布大盡^{マフダイジン}傳」の最後に書かれているが、これも本当かどうか怪しいものである。この『長曾^{マサモト}我部外伝』のことは、先に引用した長谷川（1987）で翻刻されている喜多幅武三郎宛書翰にも出て来る。この書翰にも中川の恋愛武勇伝が面白おかしく紹介されており、頭頂の禿のことも記されている。

5. ま と め

アメリカ時代のノートに残されたこの記事の下書きが、中川の恋愛武勇伝を書き始めたところで終わっているのは、残りは具体的な恋愛武勇伝なので、そこまで書いておけば、続きは簡単にかけらるだろうと思ったのではなかろうか。もちろん、前節で述べたように、この下書きと『大日本』中の「麻布大盡^{マフダイジン}傳」の間に書かれた下書きがないとは言えないが。完成版において恋愛武勇伝以外のことで大幅に加筆されている箇所でも、中川の父元績が巖垣松苗に認められて維新時にその才能を発揮する機会が来るまでの話、維新後官職を辞した後米相場場で活躍し亡くなるまでの話、跡を継いだ泰次郎がその葬儀を豪華に行ったこと、同人社に通うのに三時間かかったこと、女性に人気があったのにたやすくは応じなかったことなど、下書きでは簡単に済まされていた部分を具体的に発展させている。

このように『大日本』中の「麻布大盡^{マフダイジン}傳」と、アメリカ時代のノートに残された下書きを比較してみると、下書きから実際に発行された新聞に載せた文章への発展のさせ方は、下書きであらかじめ考えておいた文章の骨組みに具体的な話を追加したり、父親の元績が孝明天皇のもと活躍し始め、戊辰戦争にも参加したことを述べる部分で、下書きの文章では誤解を生みそうであったのをそうならないよう訂正したり、より良い表現を用いるようにするなど

31 黒川真頼（くろかわまより; 1829-1906）は桐生出身の国学者で東京帝国大学教授。

して、他の著述家でも当然しそうな書き直し方である。中川が鈍そうなのに実は器用で、ハンサムでもないのに人気があるというように、意外性のある人物だという彼の人物像をもう一度読者に思い出させるように、完成版で、恋愛武勇伝の前に「大尽顔貌蛙の如しといへども、自ら一種優美の徳あり」という文を加えていることなどは、記事に統一感を持たせるための改変である。骨組みをしっかりと作っている下書きであるという点は、のちに論文執筆の際に熊楠が作ったブレインストーミングをする時のように思いつくまま関連することを書き散らした下書きとは全く違う。「麻布大盡傳」は友人を紹介した単なる人物伝なのだから、当然のことであるといえそうかもしれない。

下書き及び『大日本』に掲載した完成版、『珍事評論』第一号の「アナバ府人傑銘々伝画抄 其一麻布泰次郎君」、1892年の喜多幅武三郎宛書翰の中川を紹介した部分の計四つを比較して得られる知見は、近年解説が進んでいる熊楠の手紙の下書きなどから得られる見解と共通している。熊楠は、興味を持ったことについて、表現を少しずつ変えて、色んな人に繰り返して書く。このような傾向は、熊楠でなくとも誰にでもあることかもしれないが、熊楠は面白いと思った話を繰り返す向きが人一倍強いように思う。拙論（2014）のように、熊楠が書いたと思われるが無署名の記事が熊楠の文章であることを突き止めるようにする場合には、熊楠のこの傾向について知っておくことが思いのほか参考になる。従って、下書きといえども翻刻する作業は今後の熊楠の研究に貢献する可能性があると思う。

参 考 文 献

- 同人社編。1876-1883.『同人社文學雑誌』1-92号。
 長谷川興蔵校訂。1987.『南方熊楠日記』全4巻。東京：八坂書房。
 長谷川興蔵。1987.「喜多幅武三郎宛書翰について—在米時代の一未公刊史料—」『南方熊楠日記』月報1。東京：八坂書房。1-6。
 長谷川興蔵・武内善信校訂。1995.『南方熊楠 珍事評論』東京：平凡社。
 井上勲。1991.『王政復古：慶応三年十二月九日の政変』東京：中央公論社。
 岩村忍・入矢義高・岡本清造監修、飯倉照平校訂。1971-1975.『南方熊楠全集』全10巻+別巻2巻。東京：平凡社。
 金井之恭ほか編。1902.『明治史料顯要職務補任録』上巻。東京：成章堂。
 小林文広。1998.『明治維新と京都：公家社会の解体』京都：臨川書店。
 松居竜五・田村義也編。2012.『南方熊楠大事典』東京：勉誠出版。
 松居竜五・月川和雄・中瀬喜陽・桐本東太編。1993.『南方熊楠を知る事典』東京：講談社。
 南方熊楠邸保存顕彰会編。2005.『南方熊楠邸資料目録』田辺市：南方熊楠邸保存顕彰会。
 奥山直司・雲藤等・神田英昭編。(2010)『高山寺蔵南方熊楠書翰—土宜法龍宛 1893-1922』東京：藤原書店。
 Preparatory School of the University of Tokio ed. 1880. *The Calendar of Tokio Daigaku Yobimon or Preparatory School of the University of Tokio 2539-40 (1879-80)*. Tokyo: Z. P. Maruya & Co.
 新谷恭明。1980.「東京大学予備門成立過程の研究」『東京大学史紀要』第3号：1-11。
 修史館編。1885.『補正明治史要』東京：博聞社。
 多田好問編。1927.『岩倉公實記』再版。中巻。京都：岩倉公舊蹟保存會。
 武内善信。2001.「南方熊楠におけるアメリカ時代—『大日本』の再検討を通して—」『熊楠研究』第3号：

136-160.

武内善信. 2012. 『闘う南方熊楠：「エコロジー」の先駆者』 東京：勉誠出版.

Tokio Daigaku (University of Tokyo) ed. 1881. *The Calendar of the Departments of Law, Science and Literature 2540-41 (1880-81)*. Tokyo: Z. P. Maruya & Co.

徳富猪一郎. 1943. 『明治天皇御宇史 第八冊〔新政内外篇〕』 近世日本國民史 69. 東京：明治書院.

東京大學豫備門編. 1879. 『東京大學豫備門一覧：本費 自明治十二年 至明治十三年』 東京：丸家善七.

吉川史子. 2011. 「アナーバー滞在中の南方熊楠とその友人達」『広島修大論集』 第52巻第1号：113-139.

吉川史子. 2014. 「回覧新聞『大日本』『雑報』中の「解散の二理由」以下六項目再考」『広島修大論集』 第55巻第1号：75-89.